

近世後期江戸語における挨拶表現

—— 人の出入りの際に使用する挨拶表現を中心に ——

山 田 里 奈

1. はじめに

本稿は近世後期江戸語における挨拶表現、特に、人が出入りする際に使用する挨拶表現を中心に概観し、全体を示すからこそわかることについて述べることを目的としている。

『柳髪新話浮世床』は、文化10～11(1813～1814)年に刊行された滑稽本である。この資料中には、次のような例が見られる。

(例1) ヤ旦那お出なさい。

アイ^{こんにち}今日は

(下層男性伝吉→中流男性徳太郎)【〈下→上〉の関係】[『床』初編・上273]¹

この例1は、客である男性が、浮世床に来た息子株の徳太郎に対して用いた例である。「おいでなさい」で、浮世床に現れた人物に対して〈いらっしゃい〉と出迎え、それに対して、「こんにちは」と答えている。そのため、ここでの「おいでなさい」は、形は命令形であるが聞き手に対して、何か要求しているということはなく、出迎える際の挨拶として用いられ、「こんにちは」は人と会った際の挨拶として用いられていると考えられる²。

¹ 用例は、(話し手→聞き手)【〈話し手と聞き手の上下関係〉】[『資料名の省略形』編巻頁]と記し、該当箇所には下線、関係のある個所には点線を付した。

² ただし、「おいでなさい」が〈来る〉の意味を完全に失っているかどうかは判断が難しい。本稿では、このような例も広く「挨拶表現」として考え、用例収集を行なった。

『日本語学大辞典』（東京堂出版）によると、「挨拶」は、「「慣用化されたものかどうか」が認定の基本条件」である。そして、「あいさつことばが有する特徴」として、「①ふれあいの機能を持つ、②表現内容に意味がない、③表現形式が定型化しており、いったん定型化したものは、次第に簡略化する、④話し手と聞き手の関係によって、待遇表現やしぐさ・行動が決まる（友定賢治「挨拶」P.3）」が挙げられている。

本稿では、②の特徴を完全に有しているとは言い切れないが、人が会おう場面で使用される表現を広く扱い「挨拶表現」とする。そして、近世後期江戸語における人の出入りの際、どのような言葉が交わされていたのか、全体を捉えてみたいと思う。

2. 先行研究

前田富祺（1985）によると、近世に入って、挨拶の言葉は多様化した。これについては、「近世の社会構造が複雑化し、人と人との関わり方も様々となり、言葉の使いわけも多様化したため（P.85）」と述べている。以下、出入りの際に用いられる挨拶についての先行研究を確認する。

2.1 出入り際の挨拶

前田（1985）によると、家の出入り際の挨拶言葉が使われ出したのは近世後期からである。具体的には、以下のような例が挙げられている。

(例2) 「行って来なよと縁宜をいはふ」（『春色辰巳園』（三））

(例3) 「おはやう御帰りをなされませ」（『春色辰巳園』（三））

(例4) 「ハイいつて参ります」（『春色梅兄誉美』（六））

(例5) 「兄さん、只今帰りました」（『閑情末摘花』（初中））

例2、例3は、「“いつてらっしゃい”に当たり」、例4は「今も使われるあいさつ言葉」、例5については「「只今」など、“只今³⁾”の語も使われだしていた」と説明している。ただし、例4の「いつてまいります」は、『日本国語大辞典（第二版）』では、外出する際に家人に言う挨拶としては、1943年の例が初出例として挙げられており⁴⁾、例4を確例とはしていない。

³⁾ 『日本国語大辞典（第二版）』に、「ただいま」は「ただいま帰りました」の略と説明されている。

他に、現在の「おはよう」に連なる表現が見られることも指摘されているが、『日本国語大辞典（第二版）』では人情本の例を初出例としており、連なる表現か、確例かという捉え方が異なっている⁵。また、「こんにちは」や「こんばんは」に当たる例が見られることも述べている。

2.2 別れの際の挨拶

前田（1985）は、「近世、もっとも多様だったのは別れの言葉で、“さらば”系から“さようなら”系に移りつつあった。家を出る時、帰る時のあいさつ言葉、朝昼晩のあいさつ言葉など、近世後期の江戸において、現在使われるのに近いあいさつ言葉が発達してきた。（P.88）」と述べている。当期に、多様で、かつ、交替時期にあたるということもあり、他にも、湯沢幸吉郎（1954・1957）や蜂谷清人（1983）や田島優（2018）等、別れの挨拶に関する研究は多く見られる。田島優（2018）では、当期における別れの挨拶表現のシステムの変化についても指摘している。これは、去る側からの表明であった挨拶表現が、見送る側からの挨拶表現を必要とすることにより、そのシステムに変化が生じたという別れの挨拶が双方向的になったという変化である。

2.3 問題の所在と本稿の目的

人の出入りに関わる挨拶表現について、先行研究や『日本国語大辞典（第二版）』の記述を使用場面ごとにまとめると、次の【表1】のようになる。

【表1】を見ると、『日本国語大辞典（第二版）』における初出例と先行研究との間にずれが見られる挨拶や近世後期江戸語での使用が不明の挨拶があることがわかる。また、先行研究では「さようなら」や「こんにちは」については扱われているものの、“人の出入りに際用いる挨拶”という大きな枠組みで見たときに、これら以外にどのような表現が用いられていたのかということも明らかにされていないと思われる。

そこで、本稿では近世後期江戸語における人の出入りに関わる挨拶表現について考察することで、以下の二点を明らかにすることを目的とする。

⁴ 初出例として、次の例が挙げられている。

* 夢声戦争日記〈徳川夢声〉昭和一八年〔1943〕四月一日「坊や、初登校につき、赤飯を祝う。『行ってまいります』ハッキリと頼もしく云って門を出た」

⁵ 『日本国語大辞典（第二版）』では、次の例が初出例として挙げられている。

* 人情本・春色恵の花〔1836〕二・九回「おいらんお早う。おねむそふだねへ」

【表 1】 人の出入りに関わる挨拶表現

| No. | 使用する場面（現代語の例） | 先行研究と『日本国語大辞典（第二版）の初出例』 | |
|-----|-----------------------------|-------------------------|--------------------------------------|
| | | 先行研究に挙げられている 近世の例と記述 | 『日本国語大辞典（第二版）の 初出例 |
| 1 | 去る側の挨拶 (いってきます) | いってまいります（人情本） | 〔初出〕 いってまいります (昭和 18) |
| | 見送る側の挨拶 (いってらっしゃい) | おはようお帰りなされませ (人情本) | 〔初出〕 いってらっしゃい (昭和 10) |
| 2 | 戻った側の挨拶 (ただいま) | ただいまかえりました（人情本） | 〔初出〕 ただいま（洒落本） |
| | 迎え入れる側の挨拶 (おかえり・おかえりなさい) | — | 〔初出例〕 おかえり（明治 21）、 おかえりなさい（明治 20） |
| 3 | 訪問した際の挨拶 (ごめんください) | — | 〔初出〕 ごめんください（滑稽本） |
| | 迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい、ようこそ) | おいでなさい（滑稽本） | 〔初出〕 おいでなさい（滑稽本） |
| 4 | 出会った際の挨拶 (相互に使用可能) | 近世後期に増える | 〔初出〕 おはよう（人情本） |
| | (おはよう、こんにちは、こんばんは) | | 〔初出〕 こんにちは（滑稽本） |
| | | | 〔初出〕 こんばんは（洒落本） |
| | 去る側の挨拶 (さようなら) | さようなら単独の例（滑稽本） | 〔初出〕 さようなら（洒落本） |

- (1) 使用する場面別（【表 1】中の No.1～4）の挨拶表現の種類と対応関係
- (2) 全体を概観することによってわかること

以下、第 3 節で調査対象資料と方法について述べ、第 4 節で近世後期江戸語における出入りの際の挨拶表現について考察を行い、第 5 節でまとめる。

3. 調査対象資料・方法

調査対象資料と方法について述べる。

3.1 調査対象資料

近世後期江戸語を反映しているとされる洒落本、滑稽本、人情本を用いて調査した。詳細は最終ページの通りである。なお、会話で用いられた例のみを扱った。

3.2 方法

用例の収集や考察の観点は、以下の通りである。

- (1) 人の出入りの場面で使用される言語表現を用例として収集した。ただし、久しぶりに会う場合に用いる「ひさしぶり」や「ご無沙汰」「しばらく」

を用いた表現や、銭湯という場面ならではと考えられる表現は除外した。

- (2) 固定化したとはいえない例まで広く収集した。
- (3) 考察の観点として、①「1.はじめに」で挙げた四点の「挨拶」の条件に当てはまるかどうか、②話し手の階層⁶、③話し手と聞き手の上下関係⁷、④どのような場面で使用されているかの四点を設定した。

4. 近世後期江戸語における人の出入りの際の挨拶表現

以下、近世後期江戸語における人の出入りの際の挨拶表現を概観し (4.1)、各場面においてどのような表現が用いられているのかを考察し (4.2)、まとめる (4.3)。

4.1 概観

人の出入りの場面で使用される挨拶表現を使用場面ごとにまとめると、次の【表2】のようになる。

4.2 場面ごとの表現

【表2】で分けた場面ごとに、用例を見ていくこととする。

4.2.1 去る側の挨拶と見送る側の挨拶 (【表2】中の「1」)

現代語において、その場を去る際に「いってきます」といえば、「行ってらっしゃい」と返ってくる。近世後期江戸語における、このような去る側の挨拶とそれに対する見送る側の挨拶を【表2】で見ると、去る側は、「いってきましょう」「いってこよう」「いってまいります⁸」「いってさんじます」等を用いている。次の例6は、「いってまいります」の例、例7は「いってさんじます」の例である。

⁶ 小松寿雄 (1985) や本文中の説明、話し手と聞き手の言葉遣いにより判断した。

⁷ 話し手と聞き手の上下関係は社会的身分によって、〈下→上〉の関係、〈対等〉の関係、〈上→下〉の関係に3分類する。

⁸ 「いってまいります」は人情本に見られるという指摘があったが (前田 (1985))、洒落本でも用例を見ることができる。『日本国語大辞典 (第二版)』では初出例が昭和18年とされていたが、近世後期江戸語あたりから使用され始めていたと考えてよいのではないかと考えられる。

【表2】近世後期江戸語における出入りの際の挨拶表現

| 使用場面 | | 命令形/命令形以外 | 挨拶表現 | 洒落本 | 滑稽本 | 人情本 | 合計 | | | |
|----------------|---|---------------|----------------------------|------------------|-----------------------|------------------------|-----|----|----|----|
| 1 | 去る側の挨拶 (いってきます) | 命令形以外 | いってきますよう | | | 1 | 1 | | | |
| | | | いってこよう | | | 1 | 1 | | | |
| | | | いってまいります・いってめへります | 2 | | 4 | 6 | | | |
| | | | いってさんじます | 1 | | | 1 | | | |
| | 見送る側の挨拶 (いってらっしゃい) | 命令形 | いってさねへ | | 1 | | 1 | | | |
| 2 | 戻った側の挨拶 (ただいま) | 命令形以外 | ただいまかえりました | 1 | | 3 | 4 | | | |
| | | | ただいまは | | | 1 | 1 | | | |
| | | | 今かえりました | | | 1 | 1 | | | |
| | | | 今けえった | | 1 | | 1 | | | |
| | 迎え入れる側の挨拶 (おかえり) | 命令形 | おかえり | | | 1 | 1 | | | |
| | | 命令形以外 | おかえりだ・おかえりか | | 1 | 8 | 9 | | | |
| 3 | 訪問した際の挨拶 (ごめんください) | 命令形 | ごめんください (い) まし | | 1 | 2 | 3 | | | |
| | | | ごめんください | | 1 | 4 | 5 | | | |
| | | | ごめんなさり (い) まし | 2 | 6 | 8 | | | | |
| | | | ごめんなさい・ごめんなせへ | | 1 | 3 | 4 | | | |
| | | 命令形以外 | おたのみもうします | | 1 | 8 | 9 | | | |
| | | | たのんます | | | 1 | 1 | | | |
| | | | 迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい、ようこそ) | 命令形 | おいでなさり (い) まし (せ)・なんし | 5 | 3 | 2 | 10 | |
| | | | | | いらっしゃり (い) まし | | 1 | 1 | 2 | |
| | おいでなさい・おいでなせへ | | | | 4 | | 4 | | | |
| | おいで | | | | 4 | | 4 | | | |
| | 命令形以外 | きさし | | | 1 | | 1 | | | |
| | | おいでなさってくださいます | | | | 2 | 2 | | | |
| | | いらしってくださいった | | | 1 | | 1 | | | |
| | | おいであそばしました | | | | 1 | 1 | | | |
| | | | 命令形以外 | おいであそばした | | | 1 | 1 | | |
| | | | | おいでなさり (い) ました | 6 | 4 | 3 | 13 | | |
| いらっしゃり (い) ました | | | | | 1 | 6 | 7 | | | |
| ようこそござんした | | | | 1 | | | 1 | | | |
| いらしった | | | | | | 1 | 1 | | | |
| おいでなさ (す) った | | | | | 2 | | 2 | | | |
| きなすった | | | | | 1 | | 1 | | | |
| きてくださいった | | | | | | 1 | 1 | | | |
| きておくれだ | | | 1 | 1 | | | | | | |
| 4 | 出会った際の挨拶 (相互に使用可能) (おはよう、こんにちは、こんばんは) | 命令形以外 | おいでだ・おいでか | | 1 | 7 | 8 | | | |
| | | | おはようござり (い) ます | | 9 | | 9 | | | |
| | | | おはやい (ね・の) | | 8 | 1 | 9 | | | |
| | | | おはよう | | 1 | 1 | 2 | | | |
| | | | こんにちは・こんちは | | 1 | 8 | 9 | | | |
| | | | こんばんは | | 1 | | 1 | | | |
| | | | 命令形 | ごきげんようございます | | 1 | | 1 | | |
| | | | | ごきげんよう・ごきげんよろしゅう | | 2 | 3 | 5 | | |
| | | | | よろしくもうしておくれ | | 1 | | 1 | | |
| | | | | ごめんください | | | 1 | 1 | | |
| | | | | 去る側の挨拶 (さようなら) | 命令形以外 | おいとま (に・を) いたします・もうします | 1 | | 10 | 11 |
| | | | | | | おいとまします | | | 1 | 1 |
| おいとま | | | 1 | | | 1 | | | | |
| おわかれもうします | | 1 | | | | 1 | | | | |
| ごきげんよう | 6 | 1 | 4 | | | 11 | | | | |
| おさらば | 5 | 4 | 1 | | | 10 | | | | |
| しからば | | 8 | 1 | | | 9 | | | | |
| そんなら | | 6 | 1 | | | 7 | | | | |
| あばよ | | 1 | | | | 1 | | | | |
| あばあば | | 2 | 2 | | | 4 | | | | |
| さようなら (ば) | 3 | 24 | 12 | 39 | | | | | | |
| またのちほど | | | 1 | 1 | | | | | | |
| 計 | | | | 31 | 103 | 118 | 252 | | | |

(例6) 使「〈略〉サア^{まい}参りやせうネ」

長「ハイいって参ります」

(中流女性お長→主人お阿)【〈下→上〉の関係】[『梅』後編卷之六134]

(例7) 茶屋「私はちよッと、行てさんじましょ」(茶屋の女房→客)【〈下→上〉の関係】[『遊』50]

どちらの例も、その場を去る際に〈いってきます〉という意味で使用している。しかし、それに対して、〈いってらっしゃい〉に相当する、見送る側の挨拶は、今回の調査範囲では、次の例8の「いってきねへ」の1例であった。

(例8) ヲイおさらば

行つて来ねへ。

(浮世床の主人鬢五郎→勇み肌の男性二人)【〈対等〉の関係】[『床』初編上58]

例8では、浮世床を去って風呂へ行こうとする男性二人が、浮世床の主人に対して、〈さようなら〉の意味で「おさらば」を用い、これに対して、「いってきねへ」と答えている。

したがって、現代語において、「いってきます」と言われたら、「いってらっしゃい」と答えるという固定化したやりとりは、近世後期江戸語では見られにくいと考えられる。

4.2.2 戻った側の挨拶と迎え入れる側の挨拶 (【表2】中の「2」)

どこかの場所から今いる場所へ帰ってきた際、現代語では、戻った側の挨拶として「ただいま」を使う。そして迎え入れる側は「おかえりなさい」や「おかえり」等を用いる。近世後期江戸語で「ただいま」に相当する挨拶としては、「ただいまかえりました」「今かえりました」「ただいまは」等の使用が見られた。以下の例9は「ただいまかえりました」の例、例10は「ただいまは」の例である。

(例9) たゞ今かへりました (下女さん→お仲)【〈下→上〉の関係】[『古』99]

(例10) [小金は不断着に成て来り]

小金「姉さん只今は。」

お夏「ヲヤ能お出だネサアお上り。」

(芸妓小金→芸妓お夏)【〈対等〉の関係】『恋』38]

例9は、下女から主人に対して用いられており、帰ったことを伝えている。例10は、芸妓同士の会話で使用されている。「は」が接続していて、「ただいま」の形ではないが、これに対して「よくおいでだね」と迎え入れられていることから挨拶として用いていると捉えられる。

一方、迎え入れる側の挨拶は、人情本において、「おかえり」系の使用が見られた。「おかえり」系とは、「おかえり」「おかえりだ」「おかえりか」をまとめて指している。

次の例11は、「おかえり」の例、例12は、「おかえりか」の例である。

(例11) 慈母おかへり (中流女性遠世→中流女性おみき)【〈対等〉の関係】『閑(四編五編)』74]

(例12) 米次郎「ハイ只今帰りました。」

万右衛門「ハ、ア馬鹿息子お帰りか。自己ア今までこれほどの戯とは思はなんだが。今日といふ今日呆れ切た。」

(中流男性万右衛門→中流男性米次郎)【〈上→下〉の関係】『閑(四編五編)』34]

例11は「お+動詞連用形」の形「おかえり」である。話し手の女性と聞き手の女性と一緒に暮らしており、親しい間柄である。例12では、帰ってきた甥が「ただいまかえりました」と言ったのに対して、叔父が「おかえりか」と迎え入れた時の例である。〈帰ってきた〉という意味を残してはいるが、誰かが帰ってきた際の定型化したやりとりの一つであったことが推測される。

4.2.3 訪問した際の挨拶と迎え入れる側の挨拶 (【表2】中「3」)

訪問した際の挨拶として、現代語では「ごめんください」を、それを迎え入れる側の挨拶として、「いらっしゃい」や「ようこそ」等が使われる。近世後期江戸語の使用について、以下、見ていこう。

(1) 訪問した際の挨拶

【表2】から、訪問した際の挨拶の特徴の一つとして、命令形「ごめんくださり(い)まし」「ごめんください」等の「くださり(い)まし」を下接する表現(以下、「ごめんください」系)と、「ごめんなさり(い)まし」「ごめ

んなさい」「ごめんねへ」等の「くださり(い)(まし)」を下接しない表現(以下、「ごめんなさい」系)の両方が見られること、さらに命令形以外での使用も見られることがわかる。「ください(まし)」の下接がなくても訪問時に使える点が、現代語と異なる。以下の例13は「ごめんください」の例、例14は「ごめんなさいまし」の例、例15は「ごめんなせへ」の例である。

(例13) [入り来たるは別人ならず手代の久七] ハイ御免下さぬ [ト言声聞てお政欠出] (手代久七→主人お組、腰元お政ら) 【〈下→上〉の関係】 [『恋』172]

(例14) [入口の障子の外に女の声] 民「ハイどなたエ」「ハイチット御免なさいまし。」(中流女性お長→中流女性お民) 【初対面・訪問時】 [『梅』第二十三回の下232]

(例15) アイごめんなせへ、ヲヤ姉さんは留守かへ。(男性→中流女性) 【初対面・訪問時】 [『梅』第九回110]

「ごめんください」も「ごめんなさいまし」も「ごめんなせへ」も聞き手の家を訪問した際に使用している。例13のように、家に入りながら用いていると考えられる例や、例14のように家の戸を開ける前に声をかけてから入る例、例15のように、相手がいるかどうかわからない場合に声をかける例、と様々ではあるが、訪問時の挨拶として使用されている。

命令形以外の言い方としては、「おたのみもうします」の例が見られた。

(例16) ハイお待み申ます。アノ丁子屋から参りましたが。此間お誂へ申た。踊衣裳の縫ものは。モウ出来ました。 [『閑(四編五編)』60]

「おたのみもうします」は、その後に点線を付したように、〈○○から来た〉という内容が続くことが多い。

したがって、訪問時に使用される挨拶としては、「ごめんください」系と「ごめんなさい」系、「おたのみもうします」の三種類が主として用いられていた。「～系」とまとめることができる体系的な表現が二種も揃っていることから、訪問した際の挨拶が一般的に行われていたことがわかる。

(2) 迎え入れる側の挨拶

(1) で挙げた「ごめんください」系等を使用して訪問してきた相手に対して、迎え入れる側は、現代語では「いらっしゃい」「ようこそ」等を使用するだろう。近世後期江戸語では、「おいでなさいまし」や「いらっしゃいまし」等の命令形の場合と、命令形以外の場合が見られた。以下、それぞれ分けて見ていく。

① 命令形での使用

命令形を用いた表現としては、以下の例 17～例 20 のように、〈来る〉の尊敬表現形式「いらっしゃいまし」や「おいでなさい(い)まし」、「おいでなさい」、「おいで」(以下、「おいで」が付くものを「おいで」系)等の使用が見られた。

(例 17) いらっしゃいまし。お二階へいらっしゃいまし。(うなぎやの店員→客)

【〈下→上〉の関係】[『梅』初編卷之三 83-84]

(例 18) 御隠居さんお出なさいまし。(下男→隠居)【〈下→上〉の関係】[『風呂』第四編卷之下 287]

(例 19) ヤ、お出なさい。作兵衛さんきのふは何所へお出なすった。(浮世床の主人鬢五郎→下層男性作兵衛)【〈対等〉の関係】[『床』280]

(例 20) アイ櫛八さん、お出。(浮世床の主人鬢五郎→中流男性櫛八)【〈対等〉の関係】[『床』274]

例 17 はうなぎやの店員が、店に入ってきた客に対して用いた例である。例 18 は、客である隠居に対して、その家の下男が用いた例である。例 19 では、浮世床の主人が客である作兵衛に対して「おいでなさい」を用いている。例 20 では例 19 と同じ話し手が、客ではない同業者に対して「おいで」を用いている。同じ話し手が聞き手との関係によって、「おいでなさい」や「おいで」を使い分けたり、「いらっしゃいまし」を用いたりすることがわかる。これらの使い分けは、挨拶として用いた例以外の〈行く・来る・いる(補助動詞含む)〉で使用された場合と一致している(拙稿(2012、2014a))。

したがって、当期、〈行く・来る・居る(補助動詞含む)〉の尊敬表現の命令形で一般的に使用された「おいで」系は、人を迎える際にも一般的表現であったことがわかる。

②命令形以外での使用

命令形以外で挨拶として用いられた例は、命令形と対応した形の「いらっしゃいます」や「おいでなさり（い）ます」、「おいでだ」等と、「くださる（ます）」を下接した「おいでなさってくださいます」や「いらっしってくださいました」等である。以下の例 21 は「おいでなさいました」の例、例 22 は「おいでか」の例である。

(例 21) これは叔父さんよくお出なさいました。さぞ御道中がお寒うございましたらう。サア、まア此方へ。(中流男性米次郎→中流男性・叔父万右衛門)【〈下→上〉の関係】[『閑(初編～三編)』258]

(例 22) 乳母^{ばあや}アお出かエ。ハイしばらくおたっしゃでよいネ。(中流女性紫雲→小三とともに来た乳母)【〈上→下〉の関係】[『仮名(第三編)』第七回 109]

例 21 は中流男性同士ではあるが、甥と叔父の関係であり、話し手は聞き手に対して済まないことがあるため、〈下→上〉の関係とした。点線を付したように、命令形以外の使用では「よう」「よく」「ようこそ」とともに用いられる例が多く見られた。例 22 は、話し手の妹に当たる女性とともに訪れた乳母に対して、「おいでか」が用いられた例である。中流女性と乳母という〈上→下〉の関係ではあるが、以前から知り合いであり、親しい間柄であることから、〈対等〉の関係に近い。このような場合に「おいでだ」が用いられることは、挨拶以外の「おいでだ」の使用でも見られる(拙稿(2012、2014a))。

次の例 23 は、「おいでなすってくださいました」の例である。

(例 23) ヲヤよくお出なすってくださいました。(小三→中流男性金五郎)【〈対等〉の関係】[『仮名』(後編)第六四 143]

したがって、命令形と同様、「おいで」系が挨拶としての使用でも、それ以外の使用でも使用されている。上下関係によって使い分けが見られることから、当期の一般的な挨拶として用いられていたと考えることができる。命令形との違いは、「くださる(ます)」を下接する例が見られることである。

4.2.4 出会った際の挨拶と去る際の挨拶—相互に使用可能な挨拶— (【表 2】中「4」)

誰かに出会った際、現代語では「おはよう」や「こんにちは」等を用い、別れる際には、「さようなら」「バイバイ」等を用いる。近世後期江戸語ではこのような場合にどのような表現を用いていたのかについて見ていく。

(1) 出会った際の挨拶 (相互に使用可能)

現代語において「おはよう」や「こんにちは」等が用いられる出会った際の挨拶について見ていく。この場合、命令形の例は見られず、命令形以外の例が見られた。

① 「おはよう・おはよい」系

まず、「おはよう・おはよい」を使用した表現 (表中の「おはようござり (います)」「おはよい (ね・の)」、「おはよう」をまとめて指すとき、「おはよう・おはよい」系) と呼ぶ) についてである。これらは滑稽本以降、バリエーションも多く、いくつかの用例が見られるようになっている。以下の例 24 は「おはようございました」の例、例 25 は「おはよう」の例、例 26 は「おはよいね」の例である。

(例 24) ヤ俳助さんお早うございました。(中流男性やみ吉→中流男性お俳助)

【〈対等〉の関係】『風呂』第四編卷之下 274】

(例 25) ハイ御隠居さんお早う。ゆうべの地震は何時でござります。(びん介→中流男性隠居)【〈対等〉の関係】『風呂』前編卷之上 19】

(例 26) ヲヤ由さんお早いネ。(芸妓米八→中流男性由次郎)【〈下→上〉の関係】『梅』第十八回 184】

例 24 は、互いにかなり丁寧な言葉遣いをする男性同士の会話、例 25 は、〈対等〉の関係での使用、例 26 は、芸妓から親しい間柄の男性への使用例である。

したがって、「おはよう・おはよい」系は、話し手と聞き手の上下関係に応じた表現が揃っている。このことから、当期に一般的に使用されていたと捉えることができる。ただし、実際に朝早く来た場合に用いられている例が多いこと、「ございます」「ございました」等、様々に活用して用いられることから、定型化しているとまではいえない。

② 「ごきげん」系

次に、「ごきげん」を使用した表現（表中の「ごきげんようございます」「ごきげんよう」をまとめて指す場合、「ごきげん」系）と呼ぶ）についてである。次の例 27 は「ごきげんよろしう」の例である。

(例 27) 此間は御無沙汰いたしました。御きげんよろしう。是は。(中流男性 銅助→中流男鬢五郎) 【〈対等〉の関係】 [『床』 351]

例 27 は、浮世床に入ってきた際の挨拶として「ごきげんよろしう」が用いられた例である。なお、「ごきげん」を使用した表現は挨拶とは別に、会った時の相手の様子を見て、「いいきげんだ」「だいぶごきげんだ」等と言う例も多く見られた。

③ 「こんにちは」、「こんばんは」

最後に、「こんにちは」や「こんばんは」等の現代語でも用いられる挨拶の例について見ていく。以下の例 28 は「こんにちは」の例、例 29 は「こんちは」、例 30 は「こんばんは」の例である。

(例 28) ヤレヤレ今日は久しぶりで。ついになくゆるゆると。身のうへばなしに鬱うまをはらし。まことに保養いたしました。(中流女性小三→中流女性紫雲) 【〈対等〉の関係】 [『仮名(第三編)』 第八回 122]

(例 29) 藤さんこんち今日は。(船宿の主人文蔵→中流男性・客藤兵衛) 【〈下→上〉の関係】 [『梅』 後編卷之四第七回 107]

(例 30) イヤ今晚は、お麦さまにお白湯さま、能いおてんきでおめでたうございッ。(中流男性飛助→お麦) 【〈下→上〉の関係】 [『七』 215]

例 28 のように、「こんにちは」とその下の「久しぶりで」と続いているように見える例もあれば、例 29 のように、「こんちは」と省略した形、かつ、下に続いているとは考えにくく、独立した挨拶として用いられていると考えられる例が見られる。例 30 は「こんばんは」の例である。「こんばんは」の例はこの 1 例のみであり、下の「お麦さまにお白湯さま、能いおてんきでおめでたうございッ」に続いているとも考えられる例であった。

したがって、「こんにちは」は前田(1985)や倉持(2012)が述べるように、当期に挨拶の言葉として一般化しつつあると考えられる。「こんばんは」は用

例数が少なく判断が難しいが、多用されていたとはいいいにくい。

(2) 去る側の挨拶（【表2】中「4」）

現代語では、去る側の挨拶として「さようなら」等が用いられている。この「さようなら」については、「さらば」や「おさらば」等とともにその成立と発達については多くの先行研究がある（蜂谷（1983）や田島（2018）等）。先行研究の指摘通り、【表2】においても、多様な言い方があり、「さようなら」の用例数が多くなっていく様相を見ることができる。本稿では、先行研究で中心に扱われている挨拶以外の挨拶表現について、以下見ていく。

①命令形での使用

命令形では「よろしくもうしておくれ」、「ごめんください」の使用が見られた。次の例31は「よろしくもうしておくれ」の例、例32は「ごめんください」の例である。

(例31) ●ごめんよ。へん、よろしく申しておくれ。

▲ハイさやうなら。

(●→▲)【〈対等〉の関係】『癖』浮虚なる人の癖並びに不実者の癖 271]

(例32) 富「夫ぢゃア御免下さい」[ト其座を立て座敷へ来り衣類着替る]

(中流女性お富→中流男性伴六)【〈対等〉の関係】『毬』五編上巻第一回 77]

例31の話し手●の「ごめんよ」には、「もう帰るよ」という現代語訳が付されている。それに続く形で「よろしく申しておくれ」があり、これに対して▲は、「ハイさやうなら」と別れの挨拶を述べている。例32は〈失礼します〉に近い使い方であるが、着替えるために席を外す際に使用している。

②命令形以外での使用

命令形以外では「おいとま（に・を）いたします・おいとまもうします」「おいとまします」、「おいとま」（以下、「おいとま」系）や「ごきげんよう」の使用が目立った。次の例33は「おいとまにいたしまししょう」の例、例34は「おいとま」の例である。

(例 33) わたくしもお暇にいたませう。(船宿の後家→客の男性)【〈下→上〉の関係】[『甲』68]

(例 34) ヘイ / \ / \ 夫ならモウ私はお暇^{いとま}。何ぞ他に御用はございませんか。(大黒屋→中流男性米次郎)【〈下→上〉の関係】[『閑』巻之二第三回204]

「おいとま」系は、例 33 のように「いたします」を伴う例も、例 34 のように「おいとま」単独でも、〈下→上〉の関係で使用されていた。

次の例 35、例 36 は「ごきげんよう」の例である。「ごきげんよう」は、出会った際の挨拶としても用いられており(4.2.4 (1) ②)、使用の幅が広い挨拶表現と考えられる。

(例 35) ヘイ御きげんよう。へいさやうなら。ヲヤ由さんばかりお帰りのかエ。旦那はお跡からかへ。(男女→中流男性由次郎・藤兵衛)【〈下→上〉の関係】[『梅』第十五回163]

(例 36) さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもござりませうが。金ぼうが事をおねがひ申します。ばばアしんならたのんだよ金ぼうやおっかアはモウ行から。おとなしくして機げんよくお遊びヨ。あばあばだよ⁹おさらばよ。(中流女性・芸妓小三→中流男性金五郎)【〈対等〉の関係】[『仮名(第三編)』第八回125]

例 35 は〈下→上〉の関係で、例 36 は丁寧な言葉遣いで話す女性が〈対等〉の関係で使用していることから、「ごきげんよう」は、敬意を示すような聞き手に対して用いられることがわかる。なお、田島(2018)が、洒落本では「さようならごきげんよう」のように、「ごきげんよう」とともに用いられていた段階から、滑稽本になると「さようなら」単独で使われるようになると指摘している。例 35 は「ごきげんよう」の後に「さようなら」が、例 36 は「さようなら」の後に「ごきげんよう」が使われている。出会った際の挨拶としても用いられる「ごきげんよう」であるが、去る際の挨拶としての使用の方が、形にばらつきがなく固定化して用いられていたと考えられる。

⁹ 「あばあば」は、幼児語である。本調査で見られた「あばあば」の2例も幼児に対して使用された例であった。

【表3】近世後期江戸語における出入りの際の挨拶

| NO. | 場面（現代語の例） | 近世後期江戸語における挨拶表現 | |
|-----|---------------------------------------|-----------------|--|
| | | 挨拶表現のバリエーション | 下位分類 |
| 1 | 去る側の挨拶 (いってきます) | いってきますよう・いってこよう | — |
| | | いってまいります系 | いってさんじます いってまいります いってめへります |
| | 見送る側の挨拶 (いってらっしゃい) | いってきねへ | — |
| 2 | 戻った側の挨拶 (ただいま) | ただいま系 | ただいま帰りました ただいまは |
| | | 今かえった | 今かえりました 今かえった |
| | 戻った側の挨拶 (おかえり・おかえりなさい) | おかえり系 | おかえり おかえりだ・おかえりか |
| 3 | 訪問した際の挨拶 (ごめんください) | ごめんください系 | ごめんくださり(い)まし ごめんください |
| | | ごめんなさい系 | ごめんなさり(い)まし ごめんなさい・ごめんなせへ |
| | | おたのみもうします系 | おたのみもうします たのんます |
| | 迎え入れる側の挨拶 (いらっしゃい・ようこそ) | いらっしゃいまし | — |
| | | おいで系 | おいでなさいまし・おいでなんし おいでなさい・おいでなせへ おいで |
| | | きさっし | — |
| | | いらしってください | — |
| | | きてくださった | — |
| | | いらっしゃいました | — |
| | | いらした | — |
| | | おいであそばした | — |
| | | おいでなされた系 | おいでなさり(い)ました おいでなされた |
| | | おいでだ | おいでだ・おいでか |
| | | ようござんした | — |
| 4 | 出会った際の挨拶 (相互に使用可能) (おはよう、こんばんは) | おはよう・おはやい系 | おはようござり(い)ます・ました おはやい(の・ね) おはよう |
| | | ごきげんよう系 | ごきげんようございます ごきげんよう・ごきげんよろしゅう |
| | | こんにちは | こんにちは こんちは |
| | | こんばんは | — |
| | 去る側の挨拶 (さようなら※) | よろしくもうしておくれ | — |
| | | ごめんください | — |
| | | おわかれもうします | — |
| | | おいとま系 | おいとま(に・を)いたします おいとまもうします おいとまします おいとま |
| | | ごきげんよう | — |

※「さようなら」「おさらば」「さらば」については先行研究によることとし、今後の課題とするが、用例数は【表2】に示した通り、多く得られた。

5. まとめ

以上、使用する場面ごとに人の出入りの際に使用する挨拶表現を見てきた。まとめると、【表3】のようになる。【表3】により、多様な表現が揃っている場面とそうではない場面があることを視覚的に捉えることができる。

(1) 使用する場面別の挨拶表現の種類と対応関係

【表3】の「1」を見ると、現代語において、「ってきます」と言われたら、「行ってらっしゃい」と答えるという固定化したやりとりは、近世後期江戸語では見られにくいことが指摘できる。【表3】の「2」の戻った側の挨拶表現としては、「ただいまかえりました」と「今かえりました」があり、その省略形「ただいま」も見られた。省略形が挨拶表現として一般的に用いられていたとは言いがたいが、使われだしていると考えられる。戻った人を迎え入れる側の挨拶表現としては、「おかえり」の使用と相手が帰ったことをそのまま述べる「おかえりだ・おかえりか」の使用が見られた。「ただいま」と「おかえり」という現代語に見られるやりとりへと近づきつつある様相を捉えることができる。なお、命令表現である「お+動詞連用形」は「お+動詞連用形+なさい」の省略形とされるが、「おかえりなさい」の例は見られなかった。これについては用例を増やしながらか、今後見ていきたい。

【表3】の「3」から、訪問時に使用される挨拶としては、「ごめんください」系と「ごめんなさい」系、「おたのみもうします」の三種類が主として用いられたことがわかる。話し手と聞き手との上下関係や話し手の階層により、「まし」の有無や「なせへ」という音訛形が使い分けられていることから、訪問時の挨拶表現として一般的に用いられていたと考えられる。これに対応する場合、「おいで」系が多用されている。当期、〈行く・来る・居る（補助動詞含む）〉の尊敬表現の命令形で一般的に使用されたのは「おいで」系であるが、挨拶表現としての使用も一般的であったと考えられる。さらに、命令形以外での使用も命令形と同様の様相が見られた。「ごめんください」系や「ごめんなさい」系、「おたのみもうします」を用いて訪問し、〈行く・来る〉の尊敬表現により迎え入れるというやりとりが定型化していたと考えられる。

【表3】の「4」から、「おはよう・おはよい」系は、話し手と聞き手の上下関係に応じた表現が揃っており、当期に一般的に使用されていたと捉えることができる。ただし、実際に朝早く来た場合に用いられている例が多いため、「早い」という意味は残っている例が多い。他に、「ごきげん」系の使用も見られた。会った時の挨拶をした後に、相手の様子を見て、「ごきげんだ」「よいごきげん

だ」等という発話が続く例も多く見られた。また、用例数は少ないが、「こんにちは」「こんちは」「こんばんは」の使用も見られた。

去る側の挨拶としては（「さようなら」「さらば」「しからば」は除く）、「よろしくもうしておくれ」や「おいとま」系、「ごきげんよう」等の使用が見られた。出会った際の挨拶としても用いられる「ごきげんよう」であるが、去る際の挨拶としての使用の方が、形にばらつきがなく固定化しているように思われる。したがって、出会った際と別れる際の挨拶表現をセットで捉えると、用例数が少ない表現もあるが、それぞれにバリエーションがあり、揃っていたことがわかる。

(2) 全体を概観することによってわかること

【表3】より、人の出入りの際の挨拶には、様々なバリエーションがあることがわかる。ただし、上記(1)で述べたように、挨拶の場面ごとに、一つのやりとりとして見ると、揃っている場合とそうではない場合があることがわかる。具体的には、【表3】の「1」では、見送る側の挨拶（「いってらっしゃい」に相当）が少ないという特徴を見出すことができる。反対に、【表3】の「3」の迎え入れる側の挨拶（「いらっしゃい」「ようこそ」に相当）は、命令形以外での使用も命令形での使用も、挨拶で用いられる場合以外の尊敬表現と同じように使用し、盛んに用いられている。【表3】の「4」の出会った際の挨拶（相互に使用可能）の場合、他の場面での使用よりも種類が多かった。出会った際の挨拶（相互に使用可能）のバリエーションが多いことは、「さようなら」の発達の影響、または共通性を見出すことができる。「さようなら」の発達は、別れの挨拶表現のシステムの変化と関連している（田島（2018））。去る側からの表明であった挨拶表現が、見送る側からの挨拶表現を必要とすることにより、そのシステムに変化が生じた（田島（2018））。【表3】の「4」で、場面とそれに対応する挨拶の表現を見ると、「さようなら」系と同時並行的に、出会った際の挨拶も相互に使用可能な表現が発達し始めているのではないかと考えられる。

6. 今後の課題

本稿では、近世後期江戸語における出入りの際に用いられる挨拶表現を見てきた。当期における挨拶場面と挨拶表現の全体像を捉えることを目的としたため、各場面についての詳しい考察まではできていない。これについては今後の課題としたい。

◎参考文献

- 大竹秋江 (1975) 「狂言における挨拶語一虎寛本を中心として」『日本文学論叢』5
 倉持益子 (2012) 「「こんにちは」の履歴書」『言語と交流』15
 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語—江戸語』東京堂出版
 田島優 (2018) 「さようなら考—その成立と別れの挨拶表現のシステム変化—」『東
 海学園 言語・文学・文化』17
 田島優 (2019) 「困惑(自己)から同情・配慮(他者)へ—感謝表現の発想法の変化—」
 『近代語研究』19
 田島優 (2020) 「人情本を利用した挨拶表現研究(序説)」『近代語研究』20
 『日本国語大辞典(第二版)』小学館、2003
 日本語学会編 (2018) 『日本語学大辞典』東京堂出版
 蜂谷清人 (1983) 「さようなら」『講座日本語の語彙』10、明治書院
 諸星美智直 (1999) 「近世武家・町人のあいさつことば」『国文学 解釈と教材の研究』
 44-6
 山田里奈 (2012) 「「いらっしゃる」系拡大の様相—江戸後期から明治20年代まで—」
 『早稲田日本語研究』21
 山田里奈 (2014a) 「江戸後期における命令形による命令表現の使用-「お～なさい」「～
 なさい」「お+動詞連用形」を中心に-」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別
 冊』21-2
 山田里奈 (2014b) 「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現—「お～なさる」系、
 「～なさる」系、「お～だ」系を中心に—」小林賢次・小林千草編『日本語史の
 新視点と現代日本語』勉誠出版
 湯沢幸吉郎 (1954・1957) 「第二 別れの言葉」『増訂江戸言葉の研究』明治書院

◎調査対象資料 本文の用例では、下線を付した省略形を記す。

- 【洒落本】『遊子方言』田舎老人多田爺 (1770) (『新編日本古典文学全集』)、『甲斐新話』
 大田南畝 (1775) (『新編日本古典文学全集』)、『古契三娼』山東京伝 (1787) (『新編
 日本古典文学全集』)、『傾城買四十八手』山東京伝 (1790) (『新編日本古典文学全集』)、
 『傾城買二筋道』梅暮里谷峨 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、『繁千話』山東京
 伝 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、【滑稽本】『譚話浮世風呂』式亭三馬 (1809) (『新
 日本古典文学大系』)、『柳髮新話浮世床』式亭三馬 (1812) (『新編日本古典文学全集』)、
 『四十八癖』式亭三馬 (1812) (『新潮日本古典集成』)、『花暦八笑人』瀧亭鯉丈 (1820)
 (岩波文庫)、『妙竹林話七偏人』梅亭金鶯 (1857) (講談社文庫)、【人情本】『仮名文
 章娘節用』曲山人 (1831) ((前編) 鶴見人情本読書会 (1998) 『鶴見日本文学』2、(後
 編) 鶴見人情本読書会 (1999) 『鶴見日本文学』3、(第三編) 鶴見人情本読書会 (2000)
 『鶴見日本文学』4)、『春色極兎誉美』為永春水 (1832) (『日本古典文学大系』)、『閑

情末摘花』松亭金水（1839）（浅川哲也（2015）『新國學復刊』7（初編～三編）、浅川哲也（2016）『人文学報』512-7、首都大学東京都市教養学部人文・社会系 首都大学東京人文科学研究科）（四・五編）、『春色恋廻染分解』山々亭有人（1860）（浅川哲也（2012）『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』（おうふう）、『毬唄三人娘』（初編～三編）松亭金水（1862）（浅川哲也（2011）『人文学報』443（首都大学東京）（初編～三編）山々亭有人（1862）、浅川哲也（2012）『人文学報』458（首都大学東京）（四編・五編）、『春色江戸紫』（初編～三編）山々亭有人（1864）（浅川哲也（2013）『人文学報』473）*本稿はJSPS 科研費による若手研究「近世後期江戸語から明治期東京語における丁寧語の体系変化に関する研究」（課題番号：22K13130）の成果の一部です。

（やまだ りな・実践女子大学専任講師）